Next Action

邦楽器とともに
アンサンブルの多様性を求めて

2023年4月28日（金）
18:30開演
渋谷区文化総合センター大和田
さくらホール

KOTO-NOBU-LOG.

カノンとカンクレス

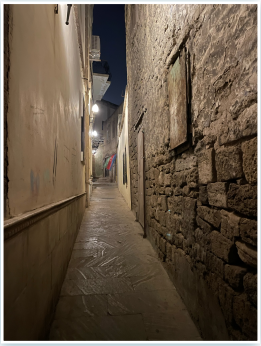
今月は、先週からの海外公演に続き、帰国後も昨年からの交流が続いていたリトアニアの音楽家との新作初演などもあり、国外の人々と連絡を取り合ったり、お会いしたり、一緒に演奏したりが続いた月でした。

海外公演では、カノンという複弦ツィター楽器と共演し、帰国してからもリトアニアのカンクレスというツィター楽器と共演できたことや、ピアノフォルテのルーツでもあるこの兄弟姉妹のような楽器に巡り会えたことは、国際政治や市民社会で断層的な隔たりが生まれている昨今の中で、改めて、それらの問題にやるせなさを感じる機会でもありました。

コーカサス旅行記

皆さんは、南コーカサス地方に位置するアゼルバイジャン共和国、ジョージア国、アルメニア共和国について、ご存知でしょうか？最近では、『大使が語るジョージア』（ティムラズ・レジャバ他/2023 講談社）が話題になり、ジョージアワインや料理などに益々注目している方も多いようですが、私は今回の3カ国を訪ねるまで南コーカサス地方やその国々のことについて、お恥ずかしながら全く知らず、今回の渡航でその3カ国が初めて身近になった一人です。

今回、日本との外交関係樹立30周年を記念して行われた外務省「コーカサス文化観光交流フェスティバル」の一環として行われアゼルバイジャン、ジョージア、アルメニアのコーカサス3カ国での7日間6公演、2ワークショップ、5取材、4共演を全て無事に終え帰国しました！滞在中の観光は、移動中の車から街中を望む程度でしたが、本当に沢山の人々とお会いし、箏やその音楽の紹介、公演にお越しくださったお客様とのフォトセッションと、毎日が目まぐるしかったですが、とても充実した幸せな滞在を過ごすことができました。



最初の渡航地であったアゼルバイジャンのバクーは、F-1の市街地レースを誘致していることもあり、4月の開催に向けて緩衝壁や観客席の設置工事が行われるなど、GPレースのため日夜準備が進められている最中でした。市内には、1200年前の遺跡を有する旧市街とザハ・ハディット（1950-2016）などの大規模な現代建築も建ち並び、カスピ海を望む通りは横浜の山下公園みたいでした。

空港からホテル到着後、昼食をとりながらの打ち合わせ。その後、その日公演会場ランドマークホテル・22Fスカイラウンジでリハーサルをして、あっという間に開演予定時刻になり各国の外交関係者、文化関係者が集い今回の公演がスタートしました。

リハーサル中から22階のスカイラウンジの外は猛烈な風音で、本番中もその風は弱まることはありませんでした。けれど、その風音と箏の音色が合わさって聴こえて、まるで日本映画の様相だったと日本映画ファンの方が終演後コメントをくれました。

終演後、市内を散策してみませんかと誘っていただき、旧市街へ散歩に出掛けました。そこで、風の強い中にも関わらず焚き火に遭遇。ゾロアスター教のお祭りの期間に行われる、その焚き火は穢れを焼くと言われているそうで、みんな真剣に炎を見つめて思い思い過ごしていました。こうして風の街と呼ばれるバクーでの初日は終わりました。

翌朝15日は、8:40にホテルを出発し、厳重な警備の国営通信社のTVスタジオへ。伝統楽器カノン（複弦のツィター楽器）奏者が司会を行う生放送番組へ出演し、楽器の紹介などを経て最後は二人目のゲストとしてポップミュージシャン（？）が現れ、みんなでダンスと番組中のセルフィー！放送が終わると、著名なプロデューサーと言われる女性も現れ、みんなでフォトセッション。番組ディレクターの「次のコーナーが始まるから出て！」と促されてスタジオを後に、そのまま夜のメイン公演会場である「ムガムセンター」へ。

“ムガム”は、2003年にユネスコの無形文化遺産に登録された口頭伝承によるアゼルバイジャンの伝統音楽で、地域や場面によって旋法が異なる音楽があるそうです。会場入りするとまだその前の利用者の記念撮影中で、私たちに気がつくと1つのムガムをみんなが演奏してくれ、ウエルカムミュージックをプレゼントされた気分でした！

11時からまずは通訳の方とMC内容を含めたソロ曲のリハーサルをして、14時から共演者であるムガム奏者の方とのリハーサル。「さくらさくら」と《春の海》の旋律を基に、ケマンチェ（胡弓の様な擦弦楽器）のエルヌールさん、ナガラ（打楽器）のカムランさん、タール（三味線の様な撥弦楽器）のザキさん、バラバーン（篳篥の様な管楽器）のラファエルさんと五人で即興的にセッションをするための進行などを1時間半程リハーサル。

開演30分前に国営通信社による取材を会場ロビーで受け、その後、ホワイエで写真を撮りたいというリクエストに一人二人と応えるうちに、開演予定時刻をとうに過ぎ、さて、そろそろ！ということで、20分押しで公演スタート。公演中は、動画や写真の撮影、音が鳴るのも当たり前、日本の静かな客席に慣れているとやりにくいのかもしれませんが、私にとってはワークショップコンサートやアウトリーチと同じ感覚で、その会場の雰囲気をとても楽しめました。特に、プロペアードしていた布を抜き取った瞬間に、開演前に記念撮影した男の子の絶叫ばりの驚く声が、とても新鮮でした！国内でのアウトリーチでも演奏していますが、ここまで驚いた子は初めて！プログラム最後は、ムガムの方達との共演で、やはり自国の音楽家と異国の音楽家の共演は響くものがある様で、とても熱烈な拍手に見送られ終演しました。

終演後は、和田純一駐アゼルバイジャン日本国大使と並んでのご来場者とのフォトセッションがスタート。アイドルの握手会並みの混雑、大使のお話では皆さん記念撮影の写真は宝物のように大切にするそうで、「この方、何回目ですか？」「縦も、横も！」と何度も撮り直しにいらっしゃる方もちらほら（苦笑）その後は、翌朝7時出発であったこともあり、ホテルに直帰し荷造りし就寝。

16日、9:30バクー発のアゼルバイジャン航空で約1時間。2カ国目は、ジョージアのトビリシ。パブリックアートや古い施設をリノベーションしたギャラリーやレストラン、可愛いお土産など、なんだかパリに滞在していた時を思い出すアート心をくすぐる街で、写真を沢山撮りたくなる街でした。訪れる1週間前に与党の法案に反対する大規模なデモが行われていたとは思えませんでしたが、議事堂前にはその痕跡が、、、そう、ここもパワー漲る人々の街でした。

空港からホテルに向かう途中で、ジョージア料理「ヒンカリ」（小籠包の様な挽肉料理）「オジャクリ」（パクチーとニンニク風味のフライドポテト）で昼食をとり、ホテルチェックイン後、14時半から翌日の公演会場でメディア2社の取材。公共放送ｌTVでのインタビューはドキュメンタリー形式で放送したいとのことで、カメラアングルを変えた別テイクを撮るなど、暗がりの中での長時間インタビューと時差からか、眠くなり始め欠伸を噛み締めていたら「あと少しで終わりにしますからね」と…。

17時半前に会場を後にして、ホテルに戻りがてら市街を『大使が語るジョージア』で紹介されていたメヒテ教会など約1時間ほど街中の教会を散策し寄宿。寄宿途中に、先ほどのジャーナリストのアナさんから箏とエレクトロニクスの共演動画を撮るのはどうだろうか、と提案の連絡があり、車内で相談の結果、翌日1時間で収録することが決まりました。その日は意外と疲れが出て、そのまま就寝。

17日、8時に朝食をとり、帰国後に初演予定の作品についての確認作業をして、10時にホテルを出発。トビリシ音楽院に到着し、MC内容を通訳さんと確認して、サウンドチェックをしていると気づけば11時半過ぎで、90分間のワークショップがスタート。会場は、シューボックス型のコンサートホールで、淡い色の内装と豪華なシャンデリア、よく響く素敵な会場でした。但し、学生の授業時間と重なっていたようで、客席は20名弱でした、、、けれど、《春の海》の旋律を基に参加者のボディパーカッションとセッションを行う「春の海セッション」を海外で初めてできたことは嬉しかったです。日本で実施する時と同じ様に、なぜか皆さん笑顔でした（笑）

その日の昼食は、道路の向かいにあったシンプルなジョージア料理のお店「サロビエ ビア」店内は完全にギャラリー調でアンティークから最近のものまで作品が展示されたレストランで、2種類のハチャプリ（チーズ入りのパン）とシュクメルリ（牛乳とニンニクで炊いた鶏肉料理）を食べ、この2日間で、ジョージア料理が日本でどうして人気なのか分かりました。

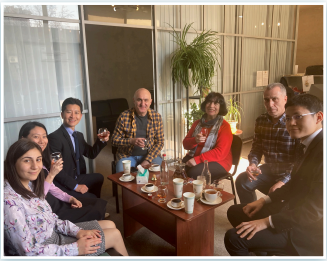
15時前に、メイン公演の会場に到着。既に到着されていたアナさんや共演のエレクレさんと合流し、楽器を準備してから着物に着替え、即興でのセッションがスタート。エレクレさんはエレクトロノーツ2021という音楽賞のグランプリを受賞した注目されている若手の音楽家とのことで、エレクトロニクスによるサウンドエフェクトを用いたセッションでした。せせらぎの音が流れ始め、渡航前に《花筏》（沢井忠夫）のお稽古をしていたからか、ふとGGAを弾いて、お互い自然と約20分間のセッションは終了しました。今回のこのセッションは、先日Kettari 財団から配信（https://fb.watch/jxn1Bi_qUk/?mibextid=cr9u03）されています。

そこから約1時間休憩して、その日の公演準備をして19時15分頃から公演スタート。会場は、左右に客席が配置された200席程の舞台、この日は曲間でのMCは行わずに、7曲を演奏。「さくらさくら」はジョージアの方達が良く知る日本のメロディとのことで、《二つの変奏曲》より「さくら」（沢井忠夫）は、とても喜ばれました。公演後は握手とフォトセッションを沢山の方達と行ない、プログラムノートにサインも求められて、しばしのポップスター気分でした！その後、会場のホワイエにて今村朗駐ジョージア日本国大使ご夫妻を囲んでの軽い夕食会となりました。今村大使は、ご自身でもお着物をお召しになるとのことで、着付けについてなどにも話に花が咲きました。寄宿すると23時近く、翌朝6時のチェックアウトのため大急ぎで荷造りをして就寝。

翌朝18日、搭乗時間が1時間遅れの10時過ぎにようやくトビリシを離陸したアルメニア航空でアルメニアのエレバンへ。
約30分で着陸後、通常、次々降りるはずの乗客が着席したままで待ち続けること5、6分。（いや、もっとだったのか？）「そこ僕の席ですけど、、」と一人の若者に声を掛けられ、「私も19Cです」とチケットの半券を見せると、「あなたもモスクワに行くの？」と聞かれ、「え！？！？」びっくり。
そう、トビリシからのロシア直行便がなくなっている理由で、エレバンを経由してモスクワへ向かう便だったようで、エレバンで降りる乗客は着陸アナウンスと同時に降りる必要があったようで、私は知らずにひたすら座り続けておりました、、、すでにエレバンから次々搭乗客が通路に行列しており、降機するのに難義しつつ到着ロビーに向かうと心配された在アルメニア日本国大使館の方々が迎えてくださいました。

すべての予定が遅れて到着した3カ国目のアルメニア。先ずは、ホテルにチェックインし、14時から市内の国立室内楽ホールへ。到着すると既に共演者のカノン（複弦の弦楽ツィター楽器）のマリアンナさんとドゥドゥク（篳篥のような管楽器）のアルタクさんが待っていて下さり、渡航前にWhatsAppというメッセンジャーアプリで連絡を取り合っていたこともあり、マリアンナさんの第一声は「こんにちは～」で、私がアルメニアでの挨拶を思い出せないでいると、「私が教えたアルメニアの挨拶は？忘れたの！？レッスンしたでしょう～」と、完全にマリアンナさんペースでした。

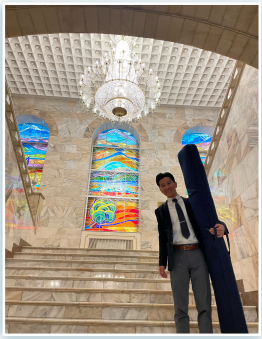
15時半からは、ホールのHover 合唱団の女声部の方達とリハーサル。この方達が、とても素敵な歌声で、びっくりしました。共演者とのリハーサルが終わると、ホールディレクターのアルメンさんが「事務所にコーヒーでも飲みに来ないか？」と誘ってくださり、事務所に行くとコーヒーよりも先に、「良いものがあるから乾杯しよう！」とアルメニアン・コニャックで乾杯しました。



初めて口にしたアルメニアン・コニャックは、グラスに注がれた時の蜂蜜のような香りと口の中に広がる芳香で、すごく良い気分になりました！（リハーサルが終わって安心したのか、酔ったのか、、）同席していたアルメニアを代表するピアニストのスヴェトラーナ・ナヴァサルジャンさんは「私は日本で34回公演したことがあるのよ」「今回、初めて箏を聴かせてもらうから、私の楽器の音もプレゼントするわ」と再び皆で舞台に戻って、みんなで彼女のピアノ演奏を聴き、なんだか音楽を通して初めて会った人たちと近しくなった幸せな経験をしました。

17時半にホテルに戻り、再びドゥドゥク奏者のアルタクさんと落ち合い、近くのカフェへ。今回、アルタクさんとは《春の海》を共演することになり、彼はすごく日本に興味があるとのことで、リハーサル後にカフェに行こうということになり、これまでのお互いの活動や今後どんな活動をしようと思っているかを1時間ほど話し合い、今回の公演が終わっても連絡は取り合いましょうと言って寄宿しました。

そして、その晩、壊れた磯足を修復し、一緒に一晩眠りました、、、海外に出て、楽器が壊れたことは今まで一度もありませんでしたが、今回、リハーサルの時にケースを開けたらポロリと取れてました。こともあろうかと、木工用ボンド持っていって良かった～と思った瞬間でした。まぁ、そんなことは国内で起こりえますが。



翌19日は、とてもタイトなスケジュールで、11時から日本音楽祭「音色」が行われるババジャンホールという立派なコンサートホールへ向かい12時から音楽祭がスタート。その音楽祭に出場の音楽愛好家や学生11組の歌や器楽曲の審査員をしたのち、ゲスト演奏。ゲスト公演には、元劇団四季の今井もえみさんが指導、指揮なさっているトビリシ日本語合唱団「やまびこ」もジョージアから訪れていて、その出演メンバーの中には2日前のトビリシでのメインコンサートに来て下さっていた若いお二人も参加！客席で「わぁ～！」とお互いに再会を笑顔で迎えました。

音楽祭終わりの表彰式では、グランプリの表彰状をお渡しする役を仰せつかったのですが、その方の名前を忘れないようにブツブツと復唱することで頭は一杯でした。（アルメニア語の発音も難しいのですが、人の名前もなかなかでした）そのイベントは、日本語や日本文化を通して、出場者の家族や友人など客席は多いに涌いていて、遠い異国でこんなにも日本文化に興味を持って、それを通して盛り上がってくれる方達がいることに、強い結びつきを感じた3時間でした。

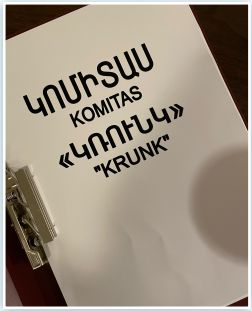
そして、イベント会場を後にして、メイン公演の室内楽ホールへ直行。16時からのリハーサルへ。昼食を取る時間がなかったことから、日本食のお弁当の差し入れを頂きました。こんなに大きなおにぎり3つは無理かも、、と思いましたが、お菜の味付けで箸は止まらなくなり完食。郷愁にかられるくらい美味しくて、食の大切さとお心遣いに、心から感謝しました。

さて、そこからは共演者とのリハーサルなどを経て、20分押しで公演スタート！2階席まで満席の沢山の方にお越しいただき、3曲終わってからのMCで「ありがとう、が思い出せません！メルシーで許してください。」（アルメニア語のありがとう“シュノルハカルチュン”は、現地でも発音が面倒ということでフランス語の“merci”が良く使われているそうです）と話すと、皆さん和んだようで温かい雰囲気の客席が、よりアットホームに感じられました。後半は、ドゥドゥクのアルタクさん、カノンのマリアンナさん、合唱団の皆さんと共演し、無事に終演。

楽屋に戻るとマリアンナさんのお母さんとお姉さんが訪ねてきていて、すごく喜んで下さっていました。私も《鳥のように》をカノンで弾きたいから楽譜を見せて欲しいと、昼間の「音色」イベントでお会いしたカノンの先生も聴きに来てくれていました。
テレビ局の取材後に、ホワイエで行われているレセプションに参加し、偶然、モスクワからエレバンへ来ていたという日本人のご家族の方にお会いするなど沢山の方とお会いした一日は終わりました。

最終日の20日は、エレバンから車で2時間程の第二の都市ギュムリへ。エレバンは石の街と言われるそうなのですが、ギュムリへの道程は岩山が続き、舗装はされていますが街灯も、ガードレールも、信号もない平原を行く移動でした。ギュムリ市内へ入ってから、内陸国のアルメニアでは珍しい魚料理レストランへ。谷底に造られたロッジ風のレストランでは、チョウザメやマスが養殖されBBQスタイルでの美味しいレストランでの昼食を経て、音楽院へ。

音楽ホールに入って楽器の準備をしていると、「学生たちがとても興味を持っているから共演できませんか」と尋ねられ、「分かりました！ぜひ、やりましょう！」と急遽ドゥドゥクの先生と共演することになり、昨日マリアンナさんと共演した《Tsaghakts Baleni》（Cherry Blossom）を演奏することにしました。（但し、この時にこの曲はアルメニアの音楽ではないことが分かりました。どういう意味で、アルメニアの伝統音楽じゃないと仰っていたのかまでは分からなかったのですが、、、）



音楽院では、最初の30分間で楽器や奏法を紹介するワークショップを設けて、休憩を挟んで60分間のコンサートを行いました。休憩中にカノンの先生も登場し、いつの間にか箏、ドゥドゥク、カノンの3人で共演することになり、《Tsaghakts Baleni》を演奏して終わりました。帰りがけに、学生から次来る時はアルメニア近代音楽の父と呼ばれるコミタス・ヴァルタペット（1869-1935）の《Krunk》（鶴）という曲を演奏してください、と楽譜のプレゼントが！次にアルメニアを訪れる時は、挑戦してみようと思います！

片付けが終わって、校長先生がARARAT（アルメニアンコニャックのブランド）とフルーツでのコニャックパーティを開いてくださり、街灯のない平原を走り続けることになるから、暗くならないうちに帰りましょうと話していましたが、あっという間に陽は落ちて18時半に音楽院を後にしました。
車のヘッドライトだけの2時間の帰り道を経て、エレバンの街の灯りを目にした時は、なんだか、日本での生活や1つの都市に集中して生活している国の人々がいることに、利便不便を抜きにして、今回のコーカサス滞在が最後になる寂しさも加わってか、少しセンチメンタルな、少しほっとしたような、色々な気持ちが交錯しました。

ホテルに到着後、この二日間ずっとご同行下さり、アルメニアのことやご自身がお好きなアルメニアの音楽のこと、これからの両国のためにご自身が思い描いている未来などをお話下さった福島正則駐アルメニア日本国大使に、心から御礼を述べました。福島大使も、二日間のスケジュールではアルメニアの皆さんにスピーチや歌を披露されたりなさり、そのお人柄とアルメニアの方々からのご人望を肌身で感じることができ、その現地の方に慕われているお姿に敬服しました。

1つ、このコーカサス旅行で無念だったのが、楽器は超過荷物、スーツケースはパンパン、長年欲しかった絨毯を結局は諦めたことです。素敵な絨毯が沢山あり、心躍りましたが、再び訪れることを心に誓って、念願の絨毯に後ろ髪をひかれながら、空路日本へ帰国しました。

今回のコーカサス3カ国で演奏した曲は

八橋検校《六段の調》
玉岡検校《鶴の声》
宮城道雄《夏の小曲》《手事》より「輪舌」《春の海》《三つの遊び》より「汽車ごっこ」
沢井忠夫《讃歌》《鳥のように》《二つの変奏曲》より「さくら」
杵屋正邦《綺羅》
望月京《Intermezzi II》
小西奈雅子《雪》
柴田南雄《合唱と箏のための さくら》
Khachatur Avetisyan《Tsaghkats Baleni》

今回、アゼルバイジャン、ジョージア、アルメニアの3カ国を巡った日々は、本当にタイトなスケジュールでしたが、沢山の方々に暖かく、時に熱狂的に迎え入れいただき、心から充実感とその意義を感じ取ることができた幸せな7日間でした。私にとって、この機会がコーカサス地方の人々が身近で、大切な国々になったことは言うまでもありません。同地域の魅力や思い出を、このニューズレターを通してお伝えできれば幸いです。

アゼルバイジャン、ジョージア、アルメニアの皆さん、またお会いしましょう！！